

避難の影響、被曝より大

がん社会 を診る

中川 恵一

て話しました。特に、県民の被曝（ひばく）量はわずかだがんが増えるレベルではないこと、避難による健康被害の方がずっと問題になってきたことを強調しました。

自然被曝と医療被曝により、私たちは年間5ミリシーベルト（mSv）程度の放射線を浴びています。原発事故に限らず、避難は健康に大きなダメージを与えます。わずかな被曝を恐れて避難を選択することは、マイナスになることが多

いのです。

フォーラム後に、柏崎刈羽原発を見学する機会がありました。福島第1原発の事故の反省と教訓を生かした現場の安全対策などについて説明を受けました。海抜15メートルの堤（想定される津波の最大高は7.8メートル）の巨大な姿や、建屋内の水密扉の頑丈さに圧倒されました。

高台に設置された数多くの電源車や送水車などの緊急車両に加え、代替熱交換器車や代替循環冷却系といった設備もありました。事故が発生し、一部の安全対策が機能しない場合に原子炉を冷やし続けるためのもので、この設備があれば少なくとも10日間は放射性物質の放出には至らない、とのことでした。

の不祥事を繰り返した過去への反省も随所に感じられました。あらゆる可能性に備えた多重で多様な安全対策から、「神への挑戦」といった印象も受けました。

もちろん人間は神ではありませんから、絶対はありません。万が一の際は、福島での経験を生かして、拙速な避難を避けて「全体としての健康」を確保するべきです。

今回訪問した長岡市は柏崎刈羽原発から約30キロ圏内にあり、「緊急防護措置準備区域」にあたります。原子力災害が発生した場合、この区域では行政の指示に従った「屋内退避」が求められます。戸締まりをして換気設備を止めるなどで、被曝量は半分程度に抑えられます。

柏崎刈羽原発の電力はおもに首都圏に供給されるものです。地元への恩恵も含め、この世界最大級の原発の活用を国全体で考えるべきではないでしょうか。

2024年12月に新潟県長岡市で開かれた「東京電力フォーラム」で、放射線とがんについて地元の方々とお話をしました。

新潟、上越の両市のサテライト会場も含めると約450人が来場されました。はじめにエネルギー専門家から、最新のエネルギー事情や電力安定供給の重要性について説明がありました。

私は放射線に関する基礎知識やがんと線量との関係、事故後の福島支援などにつ



イラスト 中村 久美

万が一に備え、緊急時対応の訓練を計170回以上実施していると聞きました。多く